コロナ対応と新しい学校生活様式の模索

◉横浜初等部　主事　片山壮吾（かたやまそうご）

２０２０年の幕開け、いよいよ東京オリンピックだと期待に胸膨らませていた我々は、新型コロナウイルスという未知のウイルスによって、よもや日常生活がここまで脅かされる事態になるなど夢にも思っていなかった。ところが、ウイルスはあっという間に世界を席巻し、約２カ月後の３月２日から急遽学校を閉鎖する事態に追い込まれた。テレビのニュースでは、新型コロナウイルスの感染状況が連日報道され、小池都知事がフリップを持って「密閉、密集、密接」の三密を避けましょうと繰り返し言っていた時期だ。社会情勢からみると、卒業式の実施は難しい状況であったが、学校医から助言をもらいながら話し合いを重ね、３月18日に東グラウンドにて、卒業式を行うことができた。当日は晴天に恵まれ、心配していた風も弱く、最高のコンディションで実施することができた。参加した６年生や保護者の方からは、澄み渡る青空と、慣れ親しんだ緑の芝生の上での卒業式は初等部らしくて良かったという意見が多く聞かれた。

４月には終息して、新学年で新たなスタートをきるという期待もむなしく、非常事態宣言が発令され、少なくとも１カ月は学校を閉鎖することが決定した。そこで、授業の穴をどう埋めるかが問題になったが、幸いにも湘南藤沢中・高等部ですでに利用していたGoogle Classroomを使い、生徒に課題を配信、出来上がった課題を提出させ、添削というサイクルが４月中旬には始まっていた。先生方の熱意には頭が下がる思いである。さらに、ほぼ同時期に英語科が先行する形で、授業の動画を作成して配信する教科が増えていった。小学生は好奇心旺盛で、新しいものが大好きなので、初めのうちは、毎朝自宅の情報機器へ課題が送られてくることに喜びを感じていたようだ。しかし、集団でのコミュニケーション不足や家の中で長時間過ごすことでの運動不足などが重なり、日に日に小学生特有の明朗活発で、何にでも前向きに取り組む姿勢が薄れていくのを感じた。また、子どもはスポンジのようにいろいろなことを吸収していくので、情報機器の操作もすぐに覚えて、保護者の目を盗んでは授業と関係ないものも見ていたようである。６月に入り、やっとコロナの勢いが弱まり、分散登校ながら学校再開の運びとなった。生徒を迎えるにあたっては、身体的距離をとるための体制づくりや消毒用品の確保など、生徒が安全・安心して登校するために教職員一丸となって準備をした。同時に、教職員を感染から守るという視点も大切で、教員は授業日以外登校しない、職員は２チームに分かれて交互に出勤という体制を取った。生徒は１学期の間、結局クラス全員で授業を受けることができなかったが、それでも学校に来ることがうれしそうであった。そして、大きな問題もなく、通知表を郵送して１学期を終えた。

さて、夏休みが明け、２学期を迎える。予定では９月１日から全員登校、２週目からは給食および通常授業が始まることになる。withコロナ生活はまだ続くが、オンラインの活用など、新しい可能性も広がった。今後も生徒の安全に十分配慮しながら、開校十周年に向けてさらに魅力ある学校づくりに努めていきたい。